

「五十歳」

主任司祭 晴佐久昌英

今年の十月、誕生日を迎えると、ぼくは四十九歳になる。あと一年で、いよいよ五十歳。それはぼくにとっては、半世紀という節目の数字以上の、特別な意味を持っている。

ぼくの父は、五十歳で死んだ。肝臓ガンだった。発見されたときはもう末期で、なすすべもなく、ひたすら苦しんで死んだ。緩和ケアなどという言葉もなかった時代の話である。

ぼくにとって、父は特別な存在だった。厳しいのにやさしくて、まじめなのに面白くて、妥協のない仕事をしながらも仕事以上に家族を大切にし、激しいストレスを抱えながらも、決して揺るがぬ熱い信仰を持っていた。

そんな父の死は、ぼくにとっては、ある意味で世界の死にも等しかったのだと思う。ぼくの人生に何か決定的な出来事が起こったと実感したし、その死を超える何か決定的な信仰を持たなければ生きていけないと直感した。

死ぬ間際、父は「くやしい」と言って泣いた。たぶん、そのとき、ぼくはこう決心したのだ。

「あとは、おまかせください。父さんのすべてはちゃんと息子が受け継ぎます。あなたのすべての奉仕と献身を、ぼくが復活させます」

父の死後、神学校に飛び込んだのも、その後のさまざまな試練を乗り越えられたのも、いまここで、こんな息子が福音のために働いているのも、父が背負った十字架のおかげである。

ぼくは、ことあるごとに言い続けてきた。

「神がお望みならば、五十歳までは生きたい。それまでは、準備期間としてあらゆる経験を積み、あらゆる挑戦をして力をつけたい。そして五十歳になったら、父がやりたくてできなかった楽しいこと、夢見て適わなかった美しいことを、父になり代わって実現させていきたい。五十歳からは、好きなことをさせてもらいます」

こういうことを言うと、「これ以上、いったい何をやりたいの？」などとかかわれるのだが、何をするかはどうでもいいのである。ぼくは、ぼくを命がけで愛してくれた一人のキリスト者の犠牲に報いて喜ばせたい。喜ばせてあの無邪気な笑顔を見たい。それだけだ。あの人は何を喜ぶかは、ぼくが一番よく知っている。